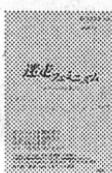


# 迷走フェミニズム



これでいいのか女と男

E・バダンテール著  
夏目幸子訳  
新曜社刊  
本体1990円(税別)

大阪府下のある公立小学校で、男の子も

者の方先は、同時にフランスの本質主義的  
的迷走を痛烈に批判する著

者たる女性が、女性としての権利を主張する  
べきことはほかにもっと  
ある。

フランスのジェンダースタディの権威  
E・バダンテールによる本書でも、座って  
小便するよう男の子を躊躇するスウェーデン  
のどんでもない運動が取り上げられてい  
る。男性のセクシユアリティそのものを糾  
弾し、女性のそれに近づけようとするの  
は、ラディカルフェミニズムを代表するア  
メリカのドウォーキンとマッキノンの影響  
だ。「挿入イコール強姦」なので「女性は  
常に犠牲者」とする彼女らの極端な思想は  
滑稽で、女性を笑い者にするばかり、と説  
くバダンテールは、「フェミニズムは人類  
の歴史上もつとも根源的な革命」という信  
念から、「男女の共通点の上に築かれた、  
男性にも受け入れられるフェミニズム」を  
提唱している。

フェミニストによる女性性贊美にも向けられ。『女性だから、男性どちがつて実際的で私利私欲がない』と言つてのける女性政治家や、『女性にとって最高の体験である出産と子育てのためなら、仕事を犠牲にして当然』とラジオで呼びかけるカウンセラーまで、女性性を理想化し、母性の枠内に押しとどめようとする動きは、一九八〇年代には考えられなかつた。この退行現象に「待つた!」をかけたバダンテールと共に感する読者は十万人を超えた。

日本の場合、「出産・子育てこそ女性の役目」という少子化対策の掛け声と、「女性の職場復帰で労働力不足を解消」という政策では、いつまでたつても女性は二流、三流の労働力にすぎず、実権は男性がにぎつたままだ。この胡散臭さにどれだけの女性が気づいているのか。女性の側にも「女性だから」という甘えがある点は、女性誌『エル』編集長のV・トランアンも近著『女にきよならするために』(拙訳、白水社)で指摘している。フランス発の男女共存のより良き形、参考にする必要は大有りだ。

(大阪外国语大学助教授・夏目幸子)